

## はじめに

- ・遊学は医家形成の基点であるとともに、その後の医家の活動を方向付けたもの。
- ・医家の遊学については海原亮氏『江戸時代の医師修業』に府中藩医の例、町泉寿郎氏『日本近世医学史論考』の中嶋宗仙や尾池家の研究などに詳細。
- ・関屋文白『遊歴日記』は嘉永五年から七年にかけて二本松・長崎を往復した日記。これを通して遊学と遊歴の共通性と違い、遊歴の背景、遊歴の実態、遊歴を通してどういうことがうかがわれるかを考えてみたい。

## 1. 医家の形成と遊学

### ① 遊学

一般に二〇歳前後の若者が二、三年から一〇年前後にわたり学力と知名度のある特定の学者に師事して医学医療の知識と技能を習得する課程。最初の遊学はその後の学問の指向性や学芸交友の形成において最も重要。

#### ・遊学者の種類

#### ・藩医の子弟

#### ・町在の医家の子弟

- ・町人・百姓からの医家志望者、医家への転身（地域の文化的環境）
- ・遊学生の選定 時期によって地域によって、また志す学問内容によつても異なるが、医者としての力量・知名度そして入門料の多寡。一般的には全国的に最初から認められた京都、そして江戸や大坂・長崎などを中心とする学塾に入門することが多い。それによって「学歴」が形成される。なお行く前に決めている場合もあるが、着いてからいろいろな情報を得て決めるといふことも多い

### 〈入門手続き〉

- ・入門には紹介者・取次あるいは請人による保証が必要
- ・入門式 盂を交わす＝師弟関係を結ぶ
- ・入門料（束脩）ほか入門に際しての入用
- ・入門誓詞（教えや秘伝の順守）や塾規（学習態度）への誓約
- ・門人帳への登載

形式的な手続き儀礼のように思われるが、「学歴」証明というだけでなく、正式に入門あるいは「門人」になることは、一定の「身分」を意味したのでは。

### 〈遊学と費用〉

- ・道中費用
- ・入門料（金二分（一両、プラス））（町泉寿郎氏の中嶋家や尾池家の研究参照）
- ・寄宿費 寄塾費（塾内居住）あるいは下宿代（京都には遊学者用の下宿屋多々）

・学習費その他 書物代・紙筆代・飲食遊興費。謝儀及び盆暮・節句ごとの祝儀

負担者 在医 親の仕送り十親類・知人からの仕送りや餞別

藩医 遊学制度のある藩の場合は藩から一定程度支給

しかしそういう藩は限られており、基本的には在医と同じ

※アルバイト 按摩・筆耕・医療活動・代診など

#### 〈学習生活〉

・遊学期間 2、3年から10年前後に及ぶことも。（ホームシック）

・学習 講義、医書会読、医療の実見と経験

一般に本道（内科）を学ぶが関連する他の分野の医家に学ぶこともあり  
儒学兼修

・筆写・筆記 師の口授の筆記、医書の筆写、（一般に医家の蔵書には写本が多い）

・交友の形成、先輩後輩との研鑽 将来にわたる学芸ネットワークの形成

・修了 伝授・免許状、肖像画や師家の格言の書幅

・帰郷 医業継承あるいは開業して自立し、地域医療活動に従事

②再遊学と遊歴 開業ないし医業継承後、一定の医療経験を蓄積したものが、新たな医学知識や自分に不足していると思われる内容をさらに修得する。もう一つは自分が新たに見いだした医療を人に示し意見を聞く。医家としての自分の力を確かめたいという思いがあつたのではと考えられる。そのとき再遊学は遊歴、諸家歴訪という形をとる。文白の旅はまさにそういうものであった。地方の医家たちの多くも同様な思いを抱いていた。そこに遊歴の出会いが生まれた。

但し遊歴はしたいと思えばできるものではなく藩医でも在医でも長期休業・長期休暇が可能か、無事に帰郷できるか、費用はどうするか、成果があげられるか、復帰できるか等々、決行するには様々な不安を伴い相当な覚悟が必要であつたと思われる。若年時の最初の遊学とは事情が異なる。それでも遊歴に出たのにはどういう背景や事情があったのか。それでつぎに、この関屋文白という人はどういう家のどういう立場の医家であったのかを見ておきたい。

## 二、関屋文白と遊歴の背景

### 1. 関屋家と関屋文白

関屋文白＝文化二年（一八一四）生、二本松藩医関屋嶺南（一一三〇石）の五男

〔関屋家系譜〕（二本松市教育委員会所蔵・関屋敏子資料）

・初代は関屋相親スケチカ（道意）。もと桑折住の人（遠藤平内の子）であつたが、関屋家の養子となり、寛保元年（一七四一）召出され、その後、寛延二年には百五十石給人格「御七医」を仰せ付けられる。宝暦六年（一七五六）没、五三歳。

・二代棲霞先生（字子徳号有隣）は父の跡式をそのまま継ぎ、「御七医」「病用掛」「定府」などを経て、増加を重ね寛政三年には二三〇石に至る。寛政八年（一七九六）没五八歳。  
・三代嶺南先生（初名吉郎・良純、名訥字仲敏号文白・有隣・里美）天明五年十一月に「文学出精」により初出仕、寛政七年家督二三〇石を継ぎ、その後「御七医」「七医坐上格式御用人」となり、増加されて二八〇石。天保二年（一八三二）没六三歳。

※二本松藩医の構成 御側医師（150～300石）—御番御免医師（80～150石）—広間医師（50～110石）—御側針医に分かれ、計20～25人程度。

近世後半には「外科側醫」として蘭方系の小此木天然がいた。（二本松市史）。

関屋家は近世中期以降に召出され、二代以降は漢方医系の最高位についていた。

### 〔関屋家系図〕（同右）

相親（道意）—子徳（有隣）[棲霞先生]—仲敏（良純、文白・有隣・里美）  
初代スケチカ  
一代理ヨシノリ  
三代ナカトシ

〔宝暦六年没〕

〔寛政八年没〕

〔嶺南先生〕〔天保二年没〕

希顔（有三・有隣）[文政八年没、三十歳]

信安（他家へ養子）

榮（栄、文白）[文政十三年没]  
サカエ  
マレヨシ

次親（律五郎・五道・里美）—次為（久太郎・有隣、のち里美を名乗つたか）  
四代ツギチカ  
五代

〔白室〕[元治元年没]  
マロウ

〔明治四年没、四〇歳〕

● 次徳（倫之介・三適・文白・良咸）  
ツギノリ

〔明治一八年没、七二歳〕—祐之介—関屋敏子（日本初の世界的プリマドンナ）  
四代ツギチカ  
五代  
（昭和一六年歿）

きん（遊歴後婚姻）

遊歴当時、藩医の地位は兄白室が継ぎ、兄の子有隣が後継者として多紀家で修学中。

### 〔文白の経歴と立場〕

文白はおそらく若年期に医学は父嶺南に、儒学は藩校敬学館（文化十四年設立）に学んだと思われるが、20歳前後の時期、江戸多紀家に数年間遊学、続いて京都をはじめとする関西方面を遊歴。帰郷後、二本松領内小浜に在医として開業し、その後（いつか不明）二人（一〇人扶持程度）で藩士の末端に連なるも、実質的には二本松城下の本町で医業および医塾活動に従事。

「慶応戊辰（四年）二本松藩家中知行記」によれば「大組二人口乃至十人口」のなかに「関屋文白」が見える。なお当時の関屋家当主「関屋里美」（白室）は「二百八十石」である。この扶持では文白は藩医の地位にあつたとは言えない。遊学の藩許を得たとは言つてるので一応は藩士であつたが、文白は実質的には在医であり、藩医の子ではある

が、「藩医につながる者」という表現しかできない立場。文白は藩医閥屋家を継ぐ可能性からは外れていた。彼は旅中も自分を語るとき二本松藩士と名乗ることは一度もなく、常に名乗りは「多紀家門人」あるいは京都の「小森家門人」であるということであった。そこに文白の医家としての矜持と屈折苦渋があつたのではないかと考えられる。

## 2. 遊歴の動機と背景

医家としての思い

- ・新たな医学の摂取、不足している知識技能の修得

「僕の今般の遊歴は（略）只己の家業未熟を憂ひ、諸国の碩儒名医に親炙して切磋琢磨の功を積み云々」

- ・自分が新たに見いだした医療医学知識を他者に示し意見を聞く。

社会的理由

- ・藩医になることはできず、低い地位のまま自分の力を發揮する場がなく、実質的に在医として「藩医につながる者」としかいえない立場からの脱皮の模索
- ・「廉直厳毅」直言の士として藩社会の中での閉塞感、孤立・疎外感、窮屈さから的一時的脱出
- ・「亡命者」への思い

「僕の性□□廉直厳毅にして義を守るに過ぎ言語の慎ミ薄ければ災害を招くもはかり難し」（中略）治世にハ智勇を顧すに時なく、まつハ賢愚肩を比ヘ勇臆席を同し、廉直の士ハ君恩薄く、奸智の士君寵に矜るの類、（中略）毀譽榮辱に一身を禁錮セラるゝは嘆息の至りならすや。」

遊歴の条件

- ・まだ妻子もなく、同居の母も死没、係累の煩いがない
- ・藩士としては低く軽いことがかえつて遊歴という長期休暇の藩許を得やすかつたか。
- ・各地の医家とわたりあえる医家としての一定の経験蓄積と自信
- ・多紀家同門として各地に一定の知己・交友の存在
- ・十分ではないが医業による一定の費用の確保（ただし藩からの支給はない）

現在の状況から一時的に離脱し各地で研鑽を積んで、新たな医家としての在り方を模索

### 三. 遊歴の諸相 一 再遊学と諸家歴訪

#### 1. 『遊歴日記』について

〈行程〉嘉永五年（一八五二）九月二日二本松出立（嘉永七年（一八五四）八月六日帰国  
・往路 二本松—水戸（藩医本間家入門）—江戸（幕府医学館主多紀家再修学）—  
名古屋（藩医浅井家入門）—京都（吉益家・小森家入門その他諸家交流）—長崎  
・帰路 長崎—備前金川（難波抱節）—京都—東海道—江戸—郡山—（二本松）—福島  
—米沢—山形滞在—会津—須賀川滞在—二本松

この間、道中各地の多くの医家を歴訪して宿泊医談。同行の申出を断り一人旅。

稿本七巻四冊。杏雨書屋所蔵（藤浪剛一氏旧蔵）。

### 〈日記の特徴〉

- ・ ふつう遊學あるいは再遊學にしても一か所、一つの塾への遊學だが、本日記は長期滞在を二、四ヶ所を含み、それぞれについて一定の具体的記述がある。
- ・ 道中行く先々の医家を歴訪、宿泊して医談。地方医家の多様な存在とその医家たちの間に形成されていた信頼感とネットワークが遊歴を通してうかがわれる。
- ・ 旅の記録としての面白さ。各地の情景だけでなくそこでの出会いや出来事が自分の心情を交えて記されていて臨場感がある。「越し方行く末」の不安と出会いの喜び楽しさ。
- ※ 残念な点 一 「遠涉漫筆」と「附録」の散佚

## 2. 遊歴の諸相

① 水戸藩医本間家へ入門寄塾 (水戸滞在・嘉永五年九月一五日～一〇月一三日)

九月一九日藩医本間益軒 (養子本間玄調) に入門、塾規、

- ・ 寄塾生活 当初は早朝の塾の掃除から雑務中心。「奴僕同様の手伝い」。  
しかしその後、益軒や塾生と「傷寒論」の一節をめぐって議論を戦わせ、それによつて益軒から認められて待遇が変化し、医業手伝い・代診となる。
- ・ 玄調による解体見学

「(十月) 六日、半晴半陰、下河原てふ所にて解体ありければ (中略) 医生集り、本間氏門生も六七輩來り、先生先たちにて早朝より彼の場へ行き一見に及ぶ。頭のなき一人を土中より掘出し洗ひ、本間玄調細き竹にて指図、(中略)、其他藩医町医在医数百人なり。一見いたしおき然るへきもの也。然し刀にても取たらんにはいかず、左もなく両三度見たればとて委敷事ハ不分明なるへし。つまりハ胴人形・医範提綱内象全図・解体新書・解体發蒙を初、其他解体書籍を広く見て可ならんか。」

- ・ 益軒から牛痘種痘などの伝授

長期滞在を請われるも辞去 この間、代診による一定の収入

※ 遊歴における文雅の必要性、詩文、とくに文白においては俳諧、俳号「和同」

② 江戸多紀家へ再遊學 (嘉永五年一〇月一九日～嘉永六年四月四日)

当時の多紀家当主 (幕府医学館主) は九代暁湖 (多紀安良・元昕) 十代棠辺 (安琢・元佶)  
（むとうき）  
（もとただ）

なお甥有隣 (藩医である兄白室の長子) が修学中

・ 車脩堂 (多紀家塾名) に寄宿

文白は二十歳前後数年間、多紀家に遊學寄宿していたこともあり、多紀家の人々と家族ぐるみの親しさ 師や家族から私用を依頼されること多し。「別格の扱い」、塾生といいうより多紀氏に仕える用人のような趣。

・医学館における聴講 森養竹・渋江抽斎・伊澤盤安等々、江戸考証学の人々と面会。

「正月廿三日晴天、医学館にて初会。曉湖先生靈枢講義相済候後、医学館にて御賄御酒肴菓子まで拝味す。七十畳の講堂に奥御医師初奥詰寄合・御番医師・小普請医師其他諸藩医師・多紀家門人町医に至るまで出席列座、講堂に居り兼御縁側通りまで充満、大目付御出役也、整々堂々として實に大都会ハ格別のもの也。」**医学館図**

・小石川養生所医師小川良意と同門の先輩後輩として親交

・昌平齋儒者安積良斎へもしばしば往訪。

・俳諧人との交流 当時江戸俳諧の中心西馬

・出立に際し、「関所手形」と「道中手形」を多紀家から発給、それには「剃髪一人」

「主人(多紀)安良要用ニ付長崎表達差越」とあり文白は「剃髪」であつた。**手形**

気になる点

・藩の発給した関所手形を持つていたはずだが、それを示す記事は一度もない。彼が関所や宿場で示そうとするのは多紀家及び京都小森家発給の道中手形である。藩士であることより、医家であることを示そうとしたか。江戸二本松藩邸との関係。江戸滞在中、藩邸へ一度も出かけていない。ふつうなら江戸藩邸へ江戸着と多紀家滞在の報告をするはずだが、藩との疎隔感を示すか。(梶原氏示唆)

・頻繁な「内密御用」このため二か月余も出立延期、「憚るところあり」「幕府医学館の関係する事もありて認めかねる事の多ければ」とあり、日記には「略す」としか記されない。これは何か。

③尾張名古屋滞在 (嘉永六年四月二五日～同五月一〇日)

町医 (藩医)

町医神波藤樹宅に寄宿。医談 (医者のあり方についての文白の論)

「僕に医の心得方大体へいかんと折入りて尋けれハ、僕答に、医道ハ安きに似てかたく浅きに似て深し、初めハ素靈難經・甲乙脉經抄よりして医經の書籍に眼をさらし、夫より歴代の方書數万巻・議論書・本草書涉獵し、中にも傷寒論・金匱を熟覽し、治療に取り掛りては幾万人となき病客を誠意精神を以深切に力を用ひ、実地より七を下し、場数を経て方をハ至て易簡に遣ひ覚え、深きより浅く難きより安きへと出て病の阴阳(陰陽)・死生・虚実・緩急の胸中に瞭然として掌上にあるか如くにあらされハ真の上巧名人とハ申難し。(略)、尽く書を信すれば書なきにしかず(中略)薄氷の思ひを忘れず、痒き所に手のとゝく様に治療するにあらされハ仁術とハ唱かたかるへしなど、夫より種々の医談数刻に及び五更眠りにつく。

・文白は医書の研究よりは実地医療を志向

・五六六日尾張藩医浅井董太郎 (同男儀一郎) へ入門。扇子料銀五匁、門人帳に記名。

・尾張藩医制への関心 浅井氏を中心とする藩の試問制度による医師免許制度

一六歳～二十五歳の者へ春秋二回一〇ヶ年の間、試問の上開業許可制度

実力による医師免許。登用への関心 (会津藩においても同様の思い)

・道中各地での医家歴訪

たとえば八王子小山村の嶋崎玄弥。

「(四月)六日雨、玄弥子に初て面会。夫々医事を初闇談数刻に及ぶ。篤実温行の好人物にして医道をも骨を折たるには感心せり。中にも産術に妙を得たる仁にて按腹手術を初腹蔵なく教示にあつかり有益の事尤多し。

「早朝迄按腹術并鎮帶の術其他産家の奥術等伝授、且種々の経験方數多咄承り有益の事多し。玄弥子は治療に困苦いたせし人にて篤行純素恭勤にして風韻もあり、實に珍敷人物、生々医談の著述面白し。ちと陰陽五行家者流の癖なきにしもあらされとも兎も角も骨を折たるものには感心せり。」

文白は行く先々で、その地の医家を訪ね、しばしば「一泊を無心」し、「早速許容」されて宿泊し医談に時を過ごしている。そこで医学医療知識の交換が行われている。長期滞在先とは別にこのような各地の医家たちの存在が文白の遊歴を支えていた。地方の医家たちの款待。そうして出会う医家たちは一本松の在医として生きる文白自身の姿と重なるものでもあった。

④京都遊学（嘉永6年5月14日～同9月18日）

京都滞在はおそらく当初からの計画、何といつても京都はまだ医学のメッカであった。

・しかし路銀払底、わずかに金一分のみ。いかに滞在費を工面するかが目前の問題。

・下宿屋松村屋万次郎 「一ヶ月三方金（金三分）にて二畳の小座敷一つかり受け、三尺の床、三尺の押入つき、三度の食餌より夜具・火鉢・行燈・机・炭・油まで先方出し呉る筈」

同宿者四人（府中藩沢崎周鼎・長崎丸山俳人文旨油屋嘉伝次・大分俳人可久・淡路藩医吉田玉城）※海原亮『江戸時代の医師修行』・土肥鶴軒『鶴軒遊戯』（同年九月文白出立後、府中藩医も当初、松村屋に下宿、のち三人共同で別に借家、滞在費に困苦）

・滞在費・学費稼ぎ 按摩稼ぎから医療活動へ

遊学先の選定 ～知名度・力量・入門料～

・新宮涼庭（室町竹屋町下ル）入門料「三方金」（金3歩）「飯料一日七九分」と聞き敬遠。

・吉益周介（復軒、松原堺丁西へ入ル） 嘉永六年六月八日入門

「入門式左の如し

東洞先生御靈前江 五十疋

畠料 五十疋

塾中江 五十疋

南涯先生御靈前江 五十疋

婢僕江 壱匁ツ、 飯料一日壹匁ツ、

塾頭 佐藤栄治

当先生江 五十疋

銀一両

松原高倉東へ入る

執事高橋正庵

御奥方江

武匁

塾生十三四人、通までには三十人斗

暑寒見舞式匁ツヽ

会日「傷寒論二六十 金匁四八」

朝廷医道長官小森典藥頭へ入門（医心館）嘉永六年七月一二日。医心館へ出講してきた尾張藩医浅井儀一郎の紹介。医心館条例・入門料免除（本式四五〇疋ほど。略式二五〇疋ほど）加門状・門人簿に記名とあるも門人帳には見えず。

同八月三日さらに小森家より医道取締役に任じられる。「道中継立証文」の発給。

（医道）取締状左の如し

関屋文白

右者当家学風執心出精被致候ニ付、格別之評議を以今般取り締筋ニ申付候、然ル上者当家門人共心得違之者、又者仁術之旨違背いたし候輩有之候ハヽ、程能く申諭、万一千不相用者も見聞被致候節ハ早速当家江相届候様可被致候事

但し当家学風執心之輩有之、其方江願出候ハヽ、何方ニ不寄、添書之上可被申越候、此段も為心得申入置候事

医道長官小森家

学頭判

執事判

丑七月

・京都の医家たちとの親交。

大橋寿作・松尾勇・平野周助・梅辻春樵・服部敬輔・浅井參河介・服部順吉・山田厚安・船曳紋吉など

・服部順吉（奥道逸門人）に入門、産科を学ぶ。嘉永6年6月17日入門、入門料免除  
・山田厚安に入門、産科学を学び「按腹診察伝授誓約書」「産科奥秘術誓約書」を提出。  
・松尾勇（松尾大社神主弟）とは福井家・三角家・宇津木家の秘伝を教えてもらう代わりに自分が服部氏から受けた産科術などを伝えるというギブ&テイクのやりとり。

「十九日晴、炎熱依然。服部順吉へ行き産術執行、帰路松尾勇へ廻り帰宿。十八日ちハ日々服部順吉並松尾勇へ朝々必ず行きぬれとも略して記さす。松尾勇には服部氏よりならひたる産術たけを教へ、また三角並福井家・宇津木家杯の奥儀の秘書ととりかひ習候約にてかくの如し。」

そのほかに注意される交流としては同郷出身の小沢斎宮（土御門家出仕）を通して心学者柴田謙蔵（柴田鳩翁の養子、修正舎）や俳人伴水園芹舎と親交。

・蘭学かぶれの者に対する文白の批判

・京医についての批判的感想「過去の名声に安住」

「かく医の衰微する根元を考るに、京師ハ東都と違ひ書籍又は療治の手際よろしくとも格別の立身出世の沙汰なきゆへ今日を安樂に暮すを是とす。東都なれハ格別の人物ハ公儀へ御召し出しニもなり、大諸侯より出入扶持も出ではけミあれとも、京地ハ昔より医の宜しき評判あれハ只々医は上手なるものと近国遠方迄も尊信せるゆへ、今日の取り廻し進退周旋などに心を用ひ、口験を以て世俗の人をあざむき金銀を貪り取り門戸広大に飾るゆへ、偶書籍手際宜き人物抔ハ己を頼み廣言はきちらし、反て流行も

セす七のまわらす居る通弊とハ成りぬ。その内山本英吉・百々一郎・神宮涼庭抔は人傑也。」

⑤長崎（嘉永6年10月9日～嘉永7年1月10日）

思いがけず丸山遊郭に滞在生活を送ることとなる（京都の下宿で同宿した長崎油屋嘉伝次こと併人文旨が遊郭経営者であつたことによる）。長崎特有の諸問題やエピソードが多く記され旅の記録としては面白い部分、医業活動も軌道に乗り、このまま長崎に居続けたいと思つたほど自由で開放的な滞在生活。長崎暮らしに心惹かれたがらも故郷への思いを断ち切れず引き裂かれるような気持ちで長崎生活を断念して帰郷の途に。

⑥帰途の医家訪問－難波抱節－

道中歴訪した中で彼が最も感心したのは帰路、立ち寄った備前金川の難波抱節であつたと思われる。藩の陪臣の医者として仕え、禄は文白と同様一〇人扶持、しかしその種痘活動と門下教育の懇切さに感心。微禄ながらも地方の在医として地域医療活動に努め、門下教育と著述活動に専心する姿は文白と同様な立場の在医としての一つの理想と見えたのではないか。

・難波抱節のこと

「支度調ひ原田氏同行にて尋るに、聞しに勝る大家にして長屋門構ひ左右ともに塾あり、其外内塾もあり、何れも二十三四才位より三十位迄の書生二十有余人、遠国より集り鄙には珍敷碩医也。此日ハ種痘日とて小児連れ來りし男子婦人凡五十人余門前市をなし、夫よりうら二階座敷に通り初ての面会に及ふに、異相にして音声高く才氣溢れ、医学にハ殊の外深切にして「博覽多通」、吉益南涯・賀川子廸子・花岡青洲の門に遊び、何れも夫々「古方書・外科書・産家書の蘊奥を究め」、著述ありて頗人傑、當時六十有四才也。「客を愛するの性ニテ頗る丁寧に遇せられ」、緩々閑話、医道得失杯討論し、愉快、自然座のすすむをしらす」

「此日も未だ病客残り門前市を成し老若男女つとひ集りたり。其中にも主人立原子ハ早速に出迎ひ、敬愛何くれとなく世話を成し物かたらる折しも、門弟両三人ツヽ傍に來り入交り立交り立原と小生の嘶を聴聞し、師弟の間柄も至て睦敷、「實に人と成り廉約小心克己奉公とも申へき仁ニテ」感心の事也。たんく馴染ミ嘶も面白く時刻の移るもしらず、医道の談話紛々然、旅情も忘れ、夕飯並に酒肴の馳走に成り、この夜も三更後漸く伊田屋へ戻りぬ。かくの如き碩医の豪傑にして陪臣、殊に僅十口斗ならてハ汚し申さぬよし、小生杯の針砭にハ至て宣敷人を見たり。「さて内重則可以勝外之輕得深則可以見誘之小ニテ、学者安逸を欲し或他の技芸に耽り、或酒色を放し、或ハ出處の正不正を論せず利禄をむさぼる輩ニハ此難波翁の進退見せたきものに思はれたり。」十五日雨、晦冥、此日出立の心得の所、痔漏切斷麻薬を用ひ治療に及ふよし、原田氏頻りに一見を望ミに付、小生より難波氏へ頼ミ留杖す。難波氏此日ハ伊田屋まで尋ね來り種々閑話。午後より小国・梁川の両氏尋ね來り離杯を催し、夕刻より難波氏へ招かれ佳肴珍味、且種々餞別杯貰ひ五更後漸く伊田屋へ帰りぬ。」

おわりに

遊歴の間、文白の心をたえず疼かせたのは「越し方行く末」の不安と「梓里（故郷）への思い」であった。自分は元に戻れるのか、また戻ったとしても結局は何も変わらないのではないか。医家としての力を發揮しうるあり方を求めての遊歴にともなう不安を解消し、充実させてくれたものは各地で直接、間接に結び付いて医療活動を開いていた医家たちとそのネットワークだった。文白と同様な思いを抱きながら各地で孜々として研鑽を積んだ者たちとの出会いが文白の遊歴を支えたといつてもよいだろう。

その代表として備前金川の難波抱節はやはり十人扶持という低い地位にありながら種痘を中心とする地域医療活動や塾生教育の面でもっとも理想的な存在に見えたのではないか。

近世後半には遊学を通して専門的な医学医療知識と技能を修得していかなければならぬという通念が定着し、こういう遊学経験者が全国各地に膨大に存在し、まず同門としての結びつき、さらに学派や漢蘭の違いを越えた地域的結びつき、それらが直接間接に結び付いた医家交流が実現していた。それは徳川期における医家医療環境の成熟達成ともいえる（明治に入つての統一的な医療制度実現の基盤）。それが遊歴を可能にしていた。遊歴日記はそういうことを示しているように思われる。「徳川の平和」のほぼ最後の時であった。

最後に、帰郷後の文白については残念ながら不明。二本松藩は奥羽越列藩同盟に組したため、一時悲惨な経路をたどった可能性がある。文白はどうしていたか。最後は二本松の医家として生涯を終えたことは間違いない。

**関屋家墓域と文白の墓**、関屋本家とは別に、野山に取り残されたような墓。

このように今は忘れられた医者たちが、当時全国で、地域医療を担っていた。